

● 2017年8月

- 2017/08/28 インドを怒らせたデウバ首相
- 2017/08/27 中印ドクラム紛争：中立堅持のネパールと印支持の日本
- 2017/08/22 連邦議会と州議会，11月26日ダブル選挙
- 2017/08/16 ネパール人労働者，韓国で自殺
- 2017/08/14 ネパールの「法の支配」，南アジア首位
- 2017/08/12 ゴビンダ医師，合意履行を求めハンスト
- 2017/08/11 プラチャンダの愛娘，ごり押し市長当選
- 2017/08/10 ネパール地方選における女性の大躍進
- 2017/08/08 京都の米軍基地（109）：ミサイル攻撃避難広報の空念仏
- 2017/08/07 京都の米軍基地(108)：司令官交代で秘密主義へ？
- 2017/08/06 イタリアの旅（17）：農業の風景
- 2017/08/05 イタリアの旅（16）：そぐわないガチャガチャ
- 2017/08/04 イタリアの旅(15)：アルプスの十字架
- 2017/08/03 イタリアの旅(14)：石造りの村
- 2017/08/02 イタリアの旅（13）：絶景のベルトーネ小屋コース
- 2017/08/01 イタリアの旅（12）：グランドジョラスに見守られトレイルラン

インドを怒らせたデウバ首相

デウバ首相訪印(8月24～27日)の裏話を、オム・アスタ・ライが『ネパリ・タイムズ』に書いている。

▼Om Astha Rai, “Deuba, Delhi and Doklam,” Nepali Times, 25–31 August 2017

それによると、モディ首相は24日の公式首脳会談の前に、予定外のお茶の席にデウバ首相を招き、ドクラム問題でインド支持を要請しようとしたらしい。本当に要請したか否かはわからないが、その後の公式会談では、前述のように、ドクラム問題には全く触れられなかった。



■訪印団到着(在印ネ大使館 HP, 8月23日)

公式会談後の「インド基金」レセプションでは、こんなやり取りもあったようだ。

R・V・パスワン消費問題担当大臣:「第三国がネパールを攻撃したらインドはネパールを守るから、もし第三国がインドを攻撃したらネパールはインドを支援すべきだ。……(中国はチベットを「呑み込んだ」が)インドはネパールをそうはさせはしない」。

このバスワン大臣の発言に対し、デウバ首相は、「中国はネパールのよき友だ……。中国はネパールの主権をいつも尊重してきた」と答えた。

このデウバ首相の本で鼻をくっつけたような返答はインド側を苛立たせたに違いない、とライはみている。

レセプションでデウバ首相の隣に座っていたのは、親中派と見られている KB・マハラ外相(MC)。そのマハラ外相に、レセプション終了後、インド側の政治家、外交官、退役軍人らが、首相にあのような発言をさせたのは外相ではないかと詰問したという。

India Foundation @indfoundation · 8月24日
A Shared Vision of Prosperity based on foundation of Peace, Stability & Democracy, will uplift us all: PM Sher Bahadur Deuba #CivicReception
英語から翻訳



■インド基金レセプション(ツイッター8月24日)

このようにインド側はドクラム問題についてはネパール側からインド支持の言質をとれなかったが、それでも共同声明には次の一項を加えることには成功した。

防衛・安全協力の強化

「11. 両国首相は、これまでの防衛協力に満足の意を表し、そして、インド軍とネパール軍の緊密な協力をさらに推進することを確認した。」

ネパール訪印団メンバーの一人は、これはネパールをブータン化させる恐れのある約束だ、とライに語ったという。

軍事協力推進の約束が小国にとって危険な側面を持つことは事実だが、それを織り込んで、インドは今回の印ネ首脳会談から期待したほどの成果は得られなかったのではないだろうか。

Written by Tanigawa [編集](#)

2017/08/28 at 21:11

カテゴリー: [インド](#), [ネパール](#), [外交](#), [中国](#)

Tagged with [ドクラム](#), [モディ首相](#), [Deuba](#)

中印ドクラム紛争: 中立堅持のネパールと印支持の日本

アジアの核保有二大国、中国とインドが、ドクラム(ドカラム)高原問題で対立、軍を派遣して至近距離で対峙、緊張が高まっている(*13)。

1. ドクラム領有権問題

両軍が対峙しているドクラム(洞郎)は、中国(チベット)・インド(シッキム)・ブータンの国境が複雑に入り組む高原地域(標高約3千m)にあり、インドとブータンがブータン領だと主張しているのにたいし、中国は中国領だと主張している。グーグル地図が国境を実線ではなく破線で画している部分もあるように、この地域の領土問題は複雑だ。



■グーグル地図、赤印ドクラム高原付近[地図差替8月29日]

2. 道路建設をめぐる中印が対立

このドクラムで、中国人民解放軍が道路建設を始めたのに対し、インドは6月16日、軍を派遣、以後、人民解放軍と至近距離(約100m)でにらみ合っている。いまのところ両軍の兵力は約300人。

この問題につき、インド側は、この地域の領有権はブータンにあり、そこでの道路建設は力による現状変更であり、ブータンとインドに重大な脅威を及ぼすものであって、断じて認められないと主張している。これに対し中国側は、自国領土内で道路建設をしているのであり、インドは直ちに軍を引くべきだと反論している。いまのところ両国とも譲る気配を全く見せず、国境をめぐる両国関係は、1962年中印紛争以降、最悪の状態になっているという。

3. 中立堅持のネパール

この中印ドクラム紛争に対し、ネパールは、いずれの国にも組しない中立の立場をとっている。

ネパールは、新憲法制定をめぐるインドと対立、非公式ながら5か月(2015年9月～16年2月)にも及ぶ事実上の国境経済封鎖の制裁を受けた。その反動もあって、歴代ネパール政権は中国に接近、いまやネ中関係は以前とは比較にならないほど緊密になっている。

8月中旬には、汪洋副首相が訪ネ、ネパール側が「一つの中国」支持を確認し「一帯一路」推進協力を表明したのに対し、中国側は対ネ投資拡大、石油・ガス資源調査、道路・鉄道建設など広範な支援を約束した。ネパールにとって、中国はいまやインドにとって代わりうる可能性のある隣の大国となりつつあるのである。

しかし、たとえそうだとしても、いまドクラム紛争につき中国支持を明言することは、ネパールにとって得策ではない。ネパールは、長年にわたりインド勢力圏内にあり、国土の三方をインドに囲まれ、物資の大半をいまなおインド経由で受け取っている。この現状を考え合わせると、ドクラム紛争について一気に中国支持に回るのはリスクが大きすぎる。結局、両国との交渉力を拡大できる「中立」の立場を表明するのが、いまのネパールの国益には最もかなうということになったのであろう(*3)。すでに8月初旬、KB・マハラ外相が、ドクラム問題ではネパールはいずれの隣国をも支持しないと述べ、中立の立場を明らかにしている(*3)。

この中印対立激化をバックに、いまデウバ首相が訪印している(公式訪問8月23～27日)。ネパール側が対印交渉の好機とみていることは疑いない。他方、インド側がネパールに圧力をかけ、何らかの形で印支持に回らせたいと考えていることにも疑いはない。

しかしながら、インド側は、非公式経済封鎖の「失敗」を教訓に、印ネ首脳会談(8月23, 24日)では、あからさまにドクラム問題を持ち出し、デウバ首相に踏み絵を踏ませることはしなかった。会談後の共同声明でも、「両国は、その領

土を、相手国を害するいかなる活動にも使用させないことを再確認した」と述べるにとどめた(*2)。親印派とみられているデウバ首相が、インド側招待の意をくみ行動してくれることを期待してのことであろう。

むろん、首脳会談以外の場では、当然ながら、ドクラム問題へのネパールの対応に関心が集まった。しかし、そうした場でも、デウバ首相はインド支持を明言しなかった。たとえば、「インド基金」主催の会(8月24日)において、デウバ首相はこう答えている。

「われわれは中国と極めて良好な関係を持ち、中国とのいかなる問題にも直面していない。……そのことにつき、インドは全く懸念するに及ばない。もちろん、いかなるときも、ネパールは国土を反印活動に利用させはしない。」(*4)

中国は、ネパール政府のこうした対印外交努力を評価し、習近平主席の訪ネ(9月中旬予定)をもって報いようとしている。

4. インド支持へ前のめりの日本

ドクラム紛争につき、「中立」堅持のネパールとは対照的に、日本は世界に先駆け、インド支持の立場を表明した。インド各紙はこれを絶賛、平松駐印大使(駐ブータン大使兼任)の発言を詳細に伝えている。

たとえば、ヒンドウスタン・タイムズは、平松大使が8月17日の会見で次のように語ったと伝えている。

<ヒンドウスタン・タイムズの取材(8月17日)に対し、平松大使はこう答えた。「ドクラムはブータンと中国との係争地であり、両国は国境交渉をしている、とわれわれは理解している……。また、インドはブータンと協定を結んでおり、これに基づきインド軍はこの地域に派遣された、ともわれわれは理解している。」/平松大使は、ドクラムの現状を力により一方的に変えるべきではない、と語った。/日本は、ドクラム紛争につき、明確に見解を述べた最初の大国である。>(*9)>

また、インディアン・エクスプレスの S・ロイも、こう述べている。<インド政府筋はこう語った。「国際社会の主要メンバーが“中立”の立場をとる中で、日本がインド支持を表明したことは、インドの立場を強くしてくれるものだ。」(*7)

このような日本称賛記事は、インド他紙にも多数みられる。そして、その際、ほぼ例外なく言及されるのが、尖閣問題である。たとえば:

Prabhash K. Dutta (*11)

日本はインドを「全面的に支持」している。「もしドクラムでの中国の行為が許されるなら、東シナ海の尖閣を失うことになる、と東京は考えているからだ。」

Geeta Mohan(*12)

日本は、中国膨張主義と対峙しており、他のどの国よりもインドの立場をよく理解している。ブータンとの関係も深い。だから日本は「インドとブータンへの明確な支持」を外交チャネルを通して表明したのだ。

このように日本のインド支持はインドを喜ばせているが、当然、中国はそれに激しく反発している。華春瑩報道官は、こう批判した。

「駐印日本大使は、(軍事的対峙につき)インドを本気で支持するつもりようだ。彼に対しては、事実関係を確認することなく、でたらめなことをいうべきではない、と忠告しておく。……ドクラムには領土問題はない。国境は両国(インドと中国)により確定され承認されている。……現状を不法に変えようとしているのは、インドであって、中国ではない。」

日本は、このような中国の激しい反発を押して、インド支持を貫くのか？ 安倍首相の訪印は9月中旬の予定。インドで、日本国首相がどのような発言をするか、これも注目されるところである。

【参照】(8月28日追加)

安倍首相訪印の狙いは？(人民網日本語版 2017年08月23日)

インドの各メディアは18日、「ドクラム対峙問題で日本がインドを支持」と誇示した。この2カ月でついにインドが「主要国」の支持を得たことを証明するものだ。だが同日遅く、時事通信は、平松賢司駐印大使が「インド支持」を表明したとの見方を在インド日本大使館が否定したと報じた。

「中国とインドの国境問題は中印両国の事だ」。北京大学の姜景奎南アジア研究センター長は「南アジア諸国と他の西側国がいずれも『一方の側につかない』中、日本はじっとしていられず、先駆けて傾斜を示した。たとえ後で釈明しても、安倍内閣がインドに公然と良い顔を見せていることは隠せない」と語る。



■在ブータン日本大使館 HP

●ドクラム対峙, 終了(8月29日追加)

印中は8月28日、ドクラム軍事対峙の終了に合意、直ちに印軍は撤退した。中国の道路建設も停止された模様だが、中国軍は引き続きこの地方の軍パトロールを継続する。中国にとっては、要するに、道路建設の(たぶん一時的)中断にすぎないということか？。

*1 Om Astha Rai, "Deuba, Delhi and Doklam," Nepali Times, 25-31 August 2017

*2 "Nepal, India issue joint statement, ink 8-pt deal (with full text)," Republica, August 25, 2017

*3 Prabhash K Dutta, "Doklam standoff continues, India and China jostle to win over Nepal," India Today, August 24, 2017

*4 Suhasini Haidar & Kallol Bhattacharjee, "On Doklam, Nepal walks a tightrope," The Hindu, AUGUST 24, 2017

*5 "Nepal's Non-Aligned Stand On Doklam Issue," <http://businessworld.in/>, 24-08-2017

*6 Narayani Basu, "What the India-China Doklam Standoff Means for Nepal," The Diplomat, July 19, 2017

*7 Shubhajit Roy, "India-China standoff at Doklam: Japan throws weight behind India and Bhutan, says no side should try to change status quo by force," Indian Express, August 19, 2017

*8 "China rebukes Japan for comment on Doklam," Times of India, Aug 19, 2017

*9 Jayanth Jacob, "Doklam standoff: Japan signals support to India over border row with China," Hindustan Times, Aug 18, 2017

*10 Sutirtho Patranobis, "Doklam standoff: China dismisses Japan's support for India," Hindustan

Times, Aug 18, 2017

*11 DuttaPrabhash, "Why Japan lent support to India against China over Doklam standoff," India Today, August 18, 2017

*12 Geeta Mohan, "Doklam standoff: Japan backs India, says no one must use unilateral force in bid to change status quo," India Today, August 18, 2017

*13 「中国はインドと争ってでもチベットから南下したい」, 北の国から猫と二人で想う事,
<http://blog.livedoor.jp/nappi11/archives/4812343.html>

Written by Tanigawa [編集](#)

2017/08/27 at 19:19

カテゴリー: [インド](#), [ネパール](#), [軍事](#), [外交](#), [中国](#)

Tagged with [シッキム](#), [ドクラム](#), [ブータン](#), [Doklam](#), [領土](#), [中印紛争](#)

連邦議会と州議会, 11月26日ダブル選挙

デウバ内閣は8月21日, 連邦議会と州議会の選挙を11月26日(日)に実施することを決めた。連邦議会選挙は, 憲法296条により, 2018年1月21日までの実施が義務づけられている。

しかしながら, 連邦議会と州議会の選挙を同時に実施することは大変だし, その前には対立抗争で延期されている第2州の地方選挙(9月18日投票)も実施しなければならない。

それに加えて, 議会は8月21日, マデシらが要求してきた憲法改正を, 政府が選挙日を決定したあとで否決してしまった。

先行き不安。稔と祭りの秋のダブル, いや正確にはトリプル選挙となるのだろうか？



■WIKI より(2017-03-10)

Written by Tanigawa [編集](#)

2017/08/22 at 12:11

カテゴリー: [選挙](#), [議会](#), [憲法](#)

ネパール人労働者，韓国で自殺

韓国紙『ハンギョレ』が 8 月 15 日、社説「移住労働者の死を呼んだ「雇用許可制」、廃止を議論すべき」において、ネパール人労働者ケシャブ・シュレスタさん(27 歳)の自殺問題を取り上げ、韓国の「雇用許可制(Employment Permit System)」を厳しく批判している。

韓国は、労働力不足に迫られ 1993 年、「産業研修生制度」を制定したが、これは劣悪な「研修労働」をはびこらせ、内外から「現代版奴隷制度」と非難されることになった。そのため、これに代わる「雇用許可制」を制定し、2004 年 8 月から施行している。

「雇用許可制」は、政府が送り出し国との間で二国間協定を結び、その国からの労働者の受け入れを入国から出国まで一元的に管理する制度。企業は、政府から雇用許可書を取得し、受け入れ外国人労働者の中から必要人数を雇用する([EPS ホームページ](#)参照)。

■外国人労働者の待遇

・雇用期間は 4 年 10 か月。再雇用は、3 か月の出国後、さらに 4 年 10 か月可能。(EPS ホームページでは、雇用期間 3 年、6 か月の出国後、再雇用 3 年となっている。)

* 合法滞在が連続 5 年以上となると永住権取得申請が可能。

・労働条件は韓国人労働者と同等。労働三権、最低賃金、健康保険、雇用保険、産業災害保険など。

・転職は 3 回まで可能。

韓国の「雇用許可制」は、このように政府が外国人労働者の受け入れにつき全般的な管理責任を持ち、しかも外国人労働者の権利を広く認めるものと思われたので、当初、国際社会の評価はきわめて高かった。国連は「公共行政大賞」を授与したし、ILO や国際移住機構(IMO)も先進的なモデルと称賛した。



■[EPS HP](#)(ネパール語版あり)

しかしながら、この「雇用許可制」も、韓国人が嫌がる危険で過酷な仕事を低コストで雇用期間限定の外国人労働者にやらせることを目的とする点では、「研修生制度」と本質的には変わりはない。外国人労働者は家族の呼び寄せはできないし、雇用主の同意がなければ、事実上、転職もできない。万が一、解雇され、無登録滞在ともなれば、巨額の保証金を没収されてしまう。そのため、たとえ低賃金や過酷労働であっても一人で耐え忍ぶほかない。外国人労働者の処遇は、事実上、雇用主が握っているからだ。

『ハンギョレ』社説が取り上げたケシャブ・シュレスタさんも、このような「雇用許可制」の犠牲者の一人である。ケシャブさんは、部品製造工場で昼夜 12 時間・2 交代制で働かされたため、不眠症となった。転職は困難だし、一時帰国しての治療も許されない。追い詰められ、結局、彼は自殺してしまった。

同様のネパール人労働者の死が、この数年で数件あるという。転職できずに自殺 2 人、夜間心臓麻痺で死亡 1 人、養豚場浄化槽で中毒死 2 人、工場 4 階から転落死 1 人など。

「日経新聞」(2017 年 3 月 22 日)によれば、韓国の「雇用許可制」による外国人労働者は 26 万人、日本の外国人技能実習生は 21 万人。人口比では、韓国の方が倍以上、多いことになる。

外国人労働者を受け入れるための制度としては、韓国の「雇用許可制」の方が優れていると思うが、たとえそうだとし、自国労働者不足の穴埋めのための安上がりの一時的労働力として外国人労働者を受け入れるなら、それも結局は「使い捨て労働者制度」(アムネステイ)と非難されても仕方ないことになってしまうだろう。



■ 梁山市外国人労働者の家 FB

【参照】

- *1 [ネパール人雇用, 公平高給の韓国](#)
- *2 [韓国, ネパール人労働者 5700 人受け入れ](#)
- *3 [韓国語検定に受検者殺到](#)
- *4 佐野孝治「韓国の「雇用許可制」と外国人労働者の現況」, 『福島大学地域創造』第 26 巻第1号, 2014.9
- *5 「[社説]移住労働者の死を呼んだ「雇用許可制」、廃止を議論すべき」, 『ハンギョレ』2017.08.15
- *6 「「通帳に残った31万円は妻と妹に…」あるネパール移住労働者の死」, 『ハンギョレ』 2017.08.10
- *7 「外国人の雇用許可制 曲がり角の「韓国モデル」」, 『日本経済新聞』, 2017/3/22
- *8 「韓国「雇用許可制」が半数 留学生バイト少なく」, 『日本経済新聞』2017/3/22
- *9 チョン・ヨンソプ(移住労働者運動後援会事務局長)「移住労働者雇用許可制 10 年、奴隷許可制だった」, 『[レイバ](#)
[ーネット](#)』, 2014.08.14

Written by Tanigawa [編集](#)

2017/08/16 at 13:39

カテゴリー: [経済](#), [人権](#)

Tagged with [研修労働](#), [韓国](#), [外国人労働](#)

ネパールの「法の支配」、南アジア首位

「法の支配指標 2016」によれば、ネパールは世界 113 か国中の第 63 位ながら、南アジアでは第 1 位となった。10 年に及ぶ人民戦争の大きな犠牲によってあがなわれた成果の一つとみてよいであろう。

* World Justice Project, *Rule of Law Index 2016*, World Justice Project, 2016

●「法の支配」4 原則

- (1) 政府機関、個人および企業による法の順守。
- (2) 法は明確で、公布され、安定的および公正であること。法は公平に適用され、人格及び財産の安全を含む基本的諸権利を守るものであること。
- (3) 法の制定、管理および適用が公知、公平および効果的であること。
- (4) 裁判は有能、倫理的かつ独立・中立の代表(裁判官)により迅速に行われること。および、裁判官の構成はその社会の住民構成を反映するものであること。

1. 「法の支配」世界順位

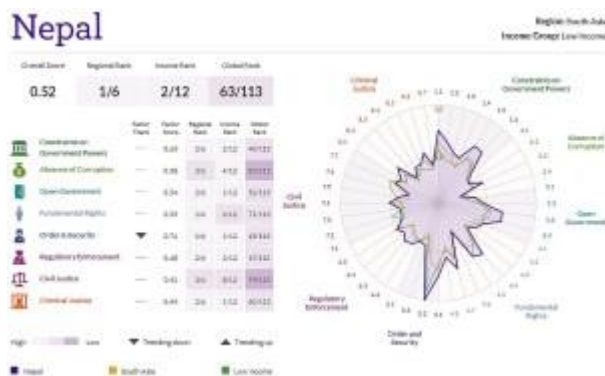
- 1 デンマーク
- 2 ノルウェー
- 3 スウェーデン
- 15 日本(東アジア 3 位)
- 63 ネパール

2. 「法の支配」南アジア順位

- 1 ネパール(世界順位 63)
- 2 インド(世界順位 66)
- 3 スリランカ(世界順位 68)
- 4 バングラディシュ(世界順位 103)
- 5 パキスタン(世界順位 106)
- 6 アフガニスタン(世界順位 111)

3. ネパールの「法の支配」

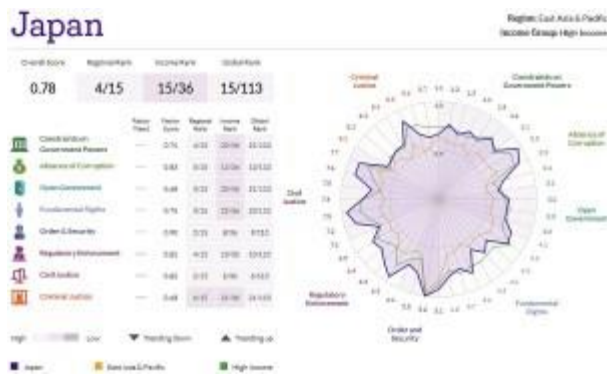
「治安」と「政府諸権力の統制」は比較的良いが、「民事裁判」と「腐敗の不在」はきわめて悪い。



4. 日本の「法の支配」

「治安」、「民事裁判」および「司法・行政等の決定の効果的執行」はよいが、「政府諸権力の統制」、「開かれた統治」、

「基本的人権」および「刑事裁判」はかなり悪い。



2017/08/14 at 18:45

カテゴリ: [行政](#), [司法](#), [政治](#), [民主主義](#)

Tagged with [法の支配](#)

ゴビンダ医師、合意履行を求めハンスト

ゴビンダ・KC 医師が、医学界改革に関する合意の履行を政府に求め、7月24日から無期限ハンストを決行している。前回(2016年11月13日～12月4日)から半年後、11回目のハンストだ。

ゴビンダ医師の要求は、医科教育と医療行政の近代化・公正化であり、終始一貫している。(参照:[ゴビンダ医師の改革諸要求](#))

ネパールでも、医者は特権階級であり、医科教育や病院経営はカネになる。当然、そこには利権を目当てに政治家や有力者、ゴビンダ医師に言わせれば「マフィア」が介入し、様々な不正・腐敗が生じる。ゴビンダ医師は、それらを排除し、地域差のない国民のための公正な医療を実現することを、一貫して要求してきたのである。

ゴビンダ医師の要求は、昨年末のハンスト闘争の結果、政府(プラチャンダ首相)が「医科教育法」(2016年9月法案提出)制定に向け努力することを約束したことにより、大きく前進するかに見えた。

ところが、政府は「医科教育法」制定を先送りしてきたばかりか、同法立法趣旨に反するような動きを強めてきた。同法制定以前の私立医大設立認可への動き、私立医大の高額授業料(1000万ルピーに及ぶ場合もある)の放置、私立医大への不正入学(学力不足受験生の裏口入学)、トリブバン大学幹部教職員と私立医大との不透明なコネなど。

これらの問題解決が難しいのは、有力政党や政治家が深く関係しているため。たとえば、いま問題にされているジャパ郡ビルタモドの「B&C病院」はマオイスト系だし、「マンモハン記念健康科学機構」はいうまでもなくUML系。ゴビンダ医師の要求が「政治的」とならざるをえないのももっともだ。

ゴビンダ医師の要求は至極もったもた。そうした要求を無期限ハンストで訴えざるをえないところに、ネパール医学界をむしばむ根深い宿痾があるのではないだろうか。

डा. गोविन्द के सी बचाऊ अभियान (Save IOM, Save Dr. Govinda K C)
8月10日 17:57

Cartoon of the week.
Courtesy: Kathmandu Post Daily.



■Facebook: SolidarityForProfGovindaKc, 10 Aug 2017

【追加(8月17日)】ゴビンダ医師, 洪水被害拡大の状況を考慮し8月15日, ハンスト中止(23日目)。

- *1 “Dr KC warns of agitation if Nat’l Medical Education Bill not amended,” Kathmandu Post, May 3, 2017
- *2 “Dr KC warns of hunger strike from tomorrow,” Kathmandu Post, Jun 4, 2017
- *3 “Dr KC warns of death fast over erring colleges Memorandum submitted to IoM dean,” Kathmandu Post, Jul 17, 2017–
- *4 “Govt seeks more time to address demands,” Kathmandu Post, Jul 30, 2017
- *5 “Dr KC’s hunger strike: Talks with govt team inconclusive,” Kathmandu Post, Aug 2, 2017–
- *6 “Save Dr Govinda KC’s life: NHRC to govt,” Kathmandu Post, Aug 4, 2017
- *7 ABHI SUBEDI, “Rainbow of KC’s Satyagraha,” Kathmandu Post, Aug 6, 2017
- *8 “Dr KC’s health deteriorating ‘critically’,” Republica, August 9, 2017
- *9 “A deal that disregards Dr KC’s demand,” Kathmandu Post, Aug 10, 2017

2017/08/12 at 19:13

カテゴリー: [行政](#), [教育](#)

Tagged with [Govinda K.C.](#), [医者](#), [医学部](#)

プラチャンダの愛娘, ごり押し市長当選

ネパール地方選では女性が大躍進, 全ポストの40%を占めるに至ったが, その中には, あまり関心しない事例もみられる。その典型が, マオイスト(MC)議長プラチャンダの娘, レヌ・ダハルさんが市長に当選した8月4日のバラトプル市再選挙。



■レヌ・ダハル(同 FB より)

チトワン郡バラトプル市(28万人)は全29区。ここはプラチャンダ議長の地元だが、もともと कांग्रेस党(NC)の地盤であり、また統一共産党(CPN-UML)も強い。マオイストは人民戦争の悪イメージが残り、はるか引き離された第3勢力。

ここに、当時首相だったプラチャンダ議長が、娘のレヌさんを市長候補として押し込んだ。レヌさんはプラチャンダ議長の第2子で1976年生まれ。マオイスト政治局員であり、第1次制憲議会比例制選出議員だったが、バラトプルでは知名度は低く不人気。

【市長候補】

MC=レヌ・ダハル

UML=デビ・ギャワリ

【副市長候補】

NC=パルバティ・シャハ

UML=ディビヤ・シャルマ

投票は5月14日。投票終了後、開票作業が行われ、28日深夜には全29区のうち第19、20区の2区を残すのみとなった。この時点で、レヌ候補(MC)はギャワリ候補(UML)に784票負けていた。

この経過を見ていたマオイストは、もはや逆転勝利は不可能と判断、開票所に来ていたマオイスト2人が開票作業中の第19区の投票用紙90枚を奪い破り捨ててしまった。そのため、開票はここでストップ。マオイスト2人は逮捕されたが、1週間後、1人10万ルピーで保釈された。

これに対し、リードしていたUMLは、当然、激怒、開票再開を要求した。ところが、MCとNCは第19区の投票やり直しを主張した。これを受け中央選管は審議した結果、再投票を決定、そして最高裁も7月30日、それを合法と認めた。こうして、バラトプル市第19区は8月4日再投票と決まった。この間、MCやNCが、再投票に向け、与党として様々な影響力を行使したことは想像に難くない。

その一方、レヌ陣営は、再投票を見越し、猛烈な働き掛けを続けた。父のプラチャンダ(MC党首、7月7日まで首相)は、連立相手のNCと手を組んで野党UMLと対抗、市長にはレヌ・ダハル、副市長にはディビヤ・シャルマを当選させるという作戦を一層強化した。また首相や与党党首の地位を利用し、様々な地元支援をも約束したという。

その結果、 कांग्रेस支持者の相当数が、再投票ではレヌ候補に投票し、結局、僅少差でレヌさんが勝利を収めた。副市長も कांग्रेस候補が勝利。

【バラトプル市長選・開票結果】

▼市長

レヌ・ダハル(MC)43,127 当選

デビ・ギャウィ(UML)42,924

▼副市長

パルパティ・シャハ(NC)47,197 当選

ディビヤ・シャルマ(UML)39,535

こうして、バラトプル市長選は、政権与党 MC=NC の思惑通りとなったが、これはどう見ても選挙の公正に反する。こんなことが前例となれば、開票状況不利な陣営が開票妨害をし、再投票に持ち込むことが許されてしまう。

今回のバラトプル市長選では、伝統的な有力者の身内えこひいき(アフノマンチェ आफ्नो मान्छे)が、依然として健在であることを改めて強烈に印象づけられた。イデオロギーや法の取り決めよりも、身内の方がはるかに優先されるということ。



■チトワン郡投票用紙(選管 HP)

- *1 “PM Dahal’s daughter files nomination for Bharatpur mayor,” Kathmandu Post, 2 May 2017
- *2 “Re-polling in Ward 19”, Nepali Times, 30 Jul 2017
- *3 “Will Renu Dahal be able to turn the tables on Devi Gyawali in Bharatpur?,” Setopati, 4 Aug, 2017
- *4 “Renu Dahal wins Bharatpur mayoral race,” Republica, 5 Aug 2017
- *5 “Bharatpur re-election: Renu Dahal turns the tables on Devi Gyawali,” Kathmandu Post, 6 Aug 2017
- *6 “Renu Dahal elected mayor of Bharatpur metropolis,” Himalayan, 6 Aug 2017
- *7 “Renu’s victory fails to impress Maoist leaders,” Kathmandu Post, 7 Aug 2017

Written by Tanigawa [編集](#)

2017/08/11 at 17:19

カテゴリー: [マオイスト](#), [選挙](#), [政党](#), [民主主義](#)

Tagged with [アフノマンチェ](#), [congress](#), [Renu Dahal](#), [UML](#)

イタリアの旅(13):絶景のベルトーネ小屋コース

フェレ谷3日目は、バスで「Loc Pont」まで行き、そこからベルトーネ小屋を経て、直下のクールマイユールに一気に下るコース。標準歩行時間は3時間半だが、絶好の晴天、この日もまた、牛のように、ぶらぶら道草を食いながら、夕方、クールマイユールの町に戻ってきた。

このルートは、町に近くて便利なおうえに、絶景ポイントがいくつもあるなので、家族連れや集団登山の生徒たちで、にぎわっていた。途切れなく、様々なアルプスの花々が咲いているのは言うまでもない。



▲Loc Pont バス停付近:飲料水はこのような水場で補給／トレッキング家族



▲ルーシェイ:フェレ谷奥に向けトレッキング／標識



▲ルーシェイ: 山小屋へ荷揚げ／ベルトーネ小屋付近: モンブランの氷河



▲ベルトーネ小屋付近: グランドジョラス山群／展望特等席



▲ベルトーネ小屋付近: 集団登山の生徒たち／奇妙な形の花



▲クールマイユール側登山口付近

Written by Tanigawa [編集](#)

2017/08/02 at 11:32

カテゴリ: [自然](#), [旅行](#)

Tagged with [イタリア](#), [クールマイユール](#), [グランドジョラス](#), [トレッキング](#), [モンブラン](#)

イタリアの旅(12):グランドジョラスに見守られトレイルラン

フェレ谷底コースを下った翌日から天候一変、雲一つない晴天となった。そこで、もう一度、バスでフェレ谷終点の「アルヌーヴァ」バス停まで行き、今度は谷を挟んでグランドジョラスをイタリア側から正面に見ることのできる反対側の山を登って行った。

「アルヌーヴァ」バス停(1700m)の近くから登山道に入り、まず 2005m 付近にある避難小屋(?)まで登り、そこからほぼ水平にボナティ小屋(2026m)までトラバース、そして、そこから谷底の「ボナティ小屋入口」バス停まで下というルート。標準コース時間は2時間だが、絶好のトレッキング日和、ぶらぶら道草をしながら、半日ほどかけて歩いた。

このコースでは、誰でも、つい時のたつのを忘れてしまうほど素晴らしい景観を楽しむことができる。アルプスの鋭鋒や迫りくる氷河、無数の可憐な花々、清冽な雪解け水が流れ下る幾筋もの沢、点在する石造りの小さな小屋……まるで天上の散歩道のような。

こうした魅力もあってか、このコースではトレイルラン(山岳マラソン)が盛んだ。2日前に行ったベニ谷ではマウンテンバイク(山岳自転車競技)が多かったが、こちらでは自転車は見なかった。その代わりに、牛のごとくのろのろ歩いている私の前や後ろから、次々とトレイルランナーが走ってくる。しかも、男女とも、信じがたいほどの、ものすごいスピード。まるでグランドジョラスに見守られ、叱咤激励されているかのよう。



▲アルヌーヴァ避難小屋(?)手前からの展望／フェレ谷奥に向けトレイルラン



▲グランドジョラス山群／不思議な形の花



▲フェレ谷(手前)とベニ谷(奥)／沢の花



▲廃屋とモンブラン／百合の花



▲ボナティ小屋／同小屋から望むモンブラン

Written by Tanigawa [編集](#)

2017/08/01 at 10:32

カテゴリー: [自然](#), [旅行](#)

Tagged with [イタリア](#), [グランドジョラス](#), [トレイルラン](#)